

6月21日 (日) ルツ記 2章	「どうか、主があなたの行いに豊かに報いてくださるように。イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるように」(12節)。この言葉は、ボアズのルツの行いに対する敬意と彼の寛容さと共に、主の恵みへの信頼。主への信仰の深さをみることができる。主に信頼して委ねる信仰を、常に携えて日々祈り合いたい。
22日 (月) ルツ記 3章	「わたしの娘よ、心配しなくていい。きっとあなたが言うとおりにします。この町のおもだった人は皆、あなたが立派な婦人であることをよく知っている」(11節)。亡き夫の母に従い、自分の家族も信仰も捨てて、見知らぬ土地に赴いたルツ。その地で、義母のために日々働くルツの姿を、ベツレヘムの人々は、異邦人であるにもかかわらず、認めていた。
23日 (火) ルツ記 4章	「どうか、主がこの若い婦人によってあなたに子宝をお与えになり、タマルがユダのために産んだペレツの家のように、御家庭が恵まれるように」(12節)。モアブの地からやって来た異邦の女性を自分たちの始祖の母ラケルとレアに譬え、ユダの家系を継ぐ者の母となるよう祝す人々。そして彼女の子どもは、やがてダビデ、そして主なるキリスト・イエスに繋がる。
24日 (水) サムエル記上 1章	「ハンナは身ごもり、月が満ちて男の子を産んだ。主に願って得た子供なので、その名をサムエル(その名は神)と名付けた」(20節)。心の底からの苦しみを主の前に注ぎだし、その御業に信頼したハンナはその願いを叶えていただいた。今日、わたしたちも心から主に信頼して、神の御国と平和(シャローム)を求めて、ひたすら主に祈りたい。

25日 (木) サムエル記上 2章	「なぜそのようなことをするのだ。…人が人に罪を犯しても、神が間に立ってくださる。だが、人が主に罪を犯したら、誰が執り成してくれよう」(23・25節)。非常に年老いてしまったエリが、ようやく息子たちの罪を知り、彼らを諭し、改めさせようとした。しかし、息子たちはエリの言葉に耳を貸そうとしない。彼らは、多くの罪の上に、さらに罪を重ねてしまった。
26日 (金) サムエル記上 3章	「サムエルは一部始終を話し、隠し立てをしなかった。エリは言った。『それを話されたのは主だ。主が御目にかなうとおりに行われるように』」(18節)。エリにはすでに告げられていた神の裁き。主はさらにサムエルにも告げられた。それは、エリも、サムエルも、そして私たちも、「神に対する罪は贖い得ない」と知らしめるため。贖い得るのは、ただ主イエス・キリスト。
27日 (土) サムエル記上 4章	「その男の報告が神の箱のことに及ぶと、エリは城門の側の彼の席からあおむけに落ち、首を折って死んだ。年老い、太っていたからである。彼は四十年間、イスラエルのために裁きを行った」(18節)。息子たちの死ではなく神の箱が奪われたことを聞いてエリは死んでしまった。エリの40年間の裁きは、イスラエルの民を神に向かう道に導くことはできなかった。
28日 (日) サムエル記上 5章	「イスラエルの神の箱を送り返そう。元の所に戻ってもらおう」(11節)。ペリシテ人はイスラエルから奪った「神の箱」の扱いに困ってしまい、送り返すことにした。「神の箱」は人間の思いで動かすことができないもの。私たちの礼拝はどうだろう。自分の願いで「神の箱」(神の言葉)を動かそうとしてはいいのだろうか。神の言葉に従う信仰を礼拝からいただいて。